

わが国における屋上庭園の起源と黎明期における展開について

Explore the Oldest Roof Garden in Japan

近藤 三雄*

Mitsuo KONDO*

1. はじめに

都市のヒートアイランド対策の切り札として、国や地方自治体の様々な施策・事業の展開もあり、屋上緑化が日本でも本格的に始動してきた。このような屋上緑化が、いつ頃から行われるようになってきたのか大変興味深いところである。屋上緑化の起源や歴史については多くの識者によって、これまでも断片的に語られてきた。古い例の代表的なものとして世界的に見れば紀元前600年頃につくられたバビロンの空中庭園の所在は既に多くの人の知るところでもある。屋上緑化や屋上庭園の起源や変遷はそれぞれの気候風土や建物の屋根に使用される素材や構造の違いによっても左右される。日本の屋上庭園の起源や変遷については山田¹⁾によって概略がまとめられている程度で、体系的に解明されていない。従来の見解では、最も古い屋上庭園は明治40年につくられた神戸オリエンタルホテルや三越呉服店とされてきたが、それ以前につくられていた可能性もある。本稿では、わが国において、建物の屋根がいつ頃、どういう目的で、芝生で緑化する芝棟や芝生屋根が設えるようになったのか、また、屋上庭園と呼べるものが何を目的として、いつの時代からつくられるようになったのか、その所在と庭園の様相について明らかにした結果を述べる。

2. 日本最古の芝棟と芝生屋根

(1) 藁葺き屋根の芝棟

日本での屋上緑化に関連した特徴的な展開として、まずあげられるのは古くから各地の藁葺き屋根の棟仕舞いとして用いられてきた芝棟の存在がある。亙理俊次の著書²⁾に詳しく、その全容がとりまとめられている。ただし、芝棟は日本固有のものではなく、同様なものがフランスのノルマンディー地方などにも見られる。しかしある時期に、ほぼ国全体で見られたのは日本だけではないかと推測される。江戸時代に日本を訪れた欧米人の多くが、日本各地にある農家の藁葺き屋根の芝棟が作りだす景観の見事さに目を奪われたようである³⁾。なお、各地で復元された縄文時代の竪穴式住居にも芝棟が設えてあるが、これは史実と異なる対応と言える。おそらく縄文時代の

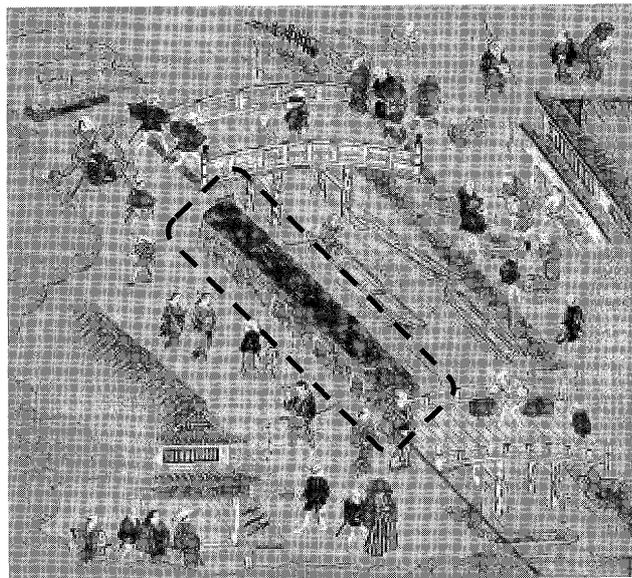


図-1 芝葺の土手蔵が画かれている六曲一双江戸
図屏風全図の一部(「江戸図屏風」毎日新
聞社)

注1) 点線部が緑化範囲

竪穴式住居では草葺の棟の固定・雨漏り防止に粘土分の多い土をのせ、その土の中に混じていた雑草の埋土種子が発芽したり、外から飛来してきた雑草の種子が発芽して芝棟状態を形成したことは十分考えられるが、芝棟の原初形態が縄文時代の竪穴式住居ににあったとは考えにくい。日本における芝棟の起源と変遷については改めて別の機会に詳しく論じたいと考えている。

(2) 江戸時代の芝葺の土手蔵

北欧のノルウェー等で見られた木造家屋の板葺き、樹皮葺きの屋根に冬季の保温や夏季の遮熱を目的とした芝生(草)屋根⁴⁾については、これまでは、かつての日本の住宅に存在したか否かは定かではなかった。

今般、江戸時代、江戸等では度重なる火災から家屋や家財を守るための策として江戸橋広小路等で延焼防止策としてつくられた土手蔵に、その可能性が見つかった。

土手蔵は明暦大火(1657年)後、火除土手(延焼防止帯としての役割を担わせられた日本橋川の河岸に、さらなる延焼防止効果を上げるため石垣を積み、上に延焼防

*東京農業大学造園科学科

*Department of Landscape Architecture Science,
Tokyo University of Agriculture

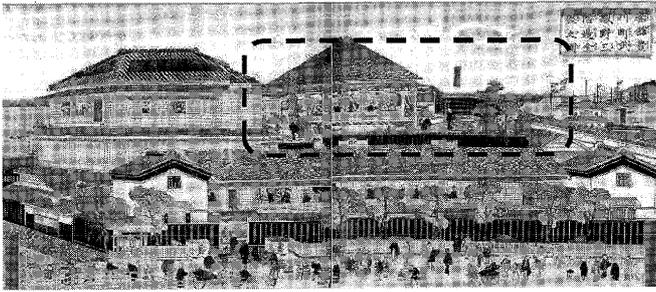


図-2 「箱館豊川町武蔵野三階造全盛之図」(市立函館図書館提供)

注1) 点線部が緑化範囲

止に役立つ松を植えたもの)を利用し、その内部を改装して倉庫として使えるようにしたものである。その名があるが、実際は石垣を積んで倉庫状の建物とし、その上を芝葺きの屋根で覆ったものである。屋根に土をのせただけでは風雨で土が浸食されてしまうため、それを防ぐために芝が植えられたものと思われる。その後、芝葺屋根では倉庫内に湿気をもたらす、肝心の収蔵品にカビが生えてしまうため互草に代え、倉庫としての機能を向上させたと言われる。芝葺の屋根を有した土手蔵が存在した年代は、1600年代の後半から1700年代初めの比較的短い期間であったと推測される⁵⁶⁾⁷⁾。倉庫も建物の範疇に入るものであり、その芝葺の屋根は、まさに今で言う芝(生)屋根であり、このことから日本にも約300年前に北欧等で見られたような芝(生)屋根が建物の屋上に存在していたということになる(図-1)。

また、ここで興味深いのは、土手蔵の屋根を葺くために使用された芝がどのようなものであったかということである。江戸時代には既に大名庭園ばかりでなく、商人の庭にも芝生は用いられていた⁸⁾。また、延焼防止策として各所に設けられていた火除地等の空地にも防塵のため芝生が張られていたということもあり、土手蔵の屋根を葺くための芝の入手は容易であったと推察される。種類としてはシバ(ノシバ)あるいはコウシュンシバ(コウライシバ)が用いられていたと思われる。

3. 日本最古の屋上庭園は箱(函)館「武蔵野楼」

武蔵野楼は、武蔵野清次郎が文久年間(1861~1864)に築島の豊川町に建てた妓楼である。当時としては珍しい一部3階造りの建物で2階屋上部分に屋上庭園がつくられていた。具体的な屋上庭園の様子は、明治6(1873)年に一曜斎国輝による錦絵「箱館豊川町武蔵野三階造全盛之図」(図-2)に詳しく画かれており、妓楼の座敷から眺められ、2基の灯笼や池、橋、石組、飛石あるいは高木(花木)が植栽されている本格的な日本庭園の趣のあるもので、その規模は錦絵に画かれた様子から推察すると100㎡内外のものであったと考えられる。函館図書館所蔵の古写真(写真-1)には武蔵野楼の全景が映っており、古写真にも一曜斎国輝が画いた錦絵の庭園部分と整合すると思われる箇所に樹木がはっきりと映ってい

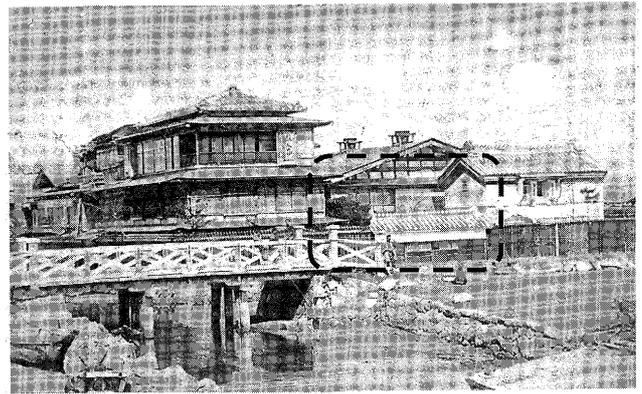


写真-1 武蔵野楼古写真(市立函館図書館提供)

注1) 点線部が緑化範囲

る。各種文献の記述⁹⁾¹⁰⁾、錦絵、古写真等から総合的に判断すると、武蔵野楼の屋上には間違いなく屋上庭園が実在していた。また、箱館(戊辰)戦争の折、明治2年5月11日の新政府軍による箱館総攻撃を翌日に控え、榎本武揚らの箱館政府(旧幕軍)の幹部たちが武蔵野楼で別盃を交わしたという記述もあり¹¹⁾¹²⁾、その文献にも2階の屋上には庭園が設けられていたとされていることから、文久年間に武蔵野楼が建設された時点で併せて屋上庭園もつくられていたと推察される。武蔵野楼は明治6年には他の場所に移ったとされるため、武蔵野楼の屋上庭園は幕末(文久年間1861~1864)につくられ、明治6(1873)年までの10数年間、つまり幕末から明治にかけての時代の大きな転換期に北の国際的商都、箱(函)館の華やかな歴史の舞台の一役を担った。

武蔵野清次郎がどういう意図で妓楼の2階に屋上庭園をつくったのかを示す記述は見つかっていないが、当時の箱館には21軒の妓楼があったと言われ、他と差別化を図り、人寄せ・集客効果を狙ってつくられたものと推察される。いずれにしても明治以前の日本家屋に屋上庭園がつくられていたという事実は他にはなく、現時点で明らかになっているわが国最古の屋上庭園であるという位置付けができる。

4. 明治中期の屋上庭園

(1) 東京銀座 岩谷商会本店の屋上庭園

「明治のたばこ王」として名をはせた岩谷松平の店舗兼住宅は東京・銀座煉瓦街の一面、現在の松屋銀座の位置にあり、間口が46mに及ぶ連屋で2階建て、和洋折衷で一部1階の陸屋根には立派な庭園がつくられていた。現時点では実物の写真1葉(写真-2)と写真解説として「岩谷商会の屋上には写真のような庭園があり、夏になると滝が落ちるように仕掛けられていた。」¹³⁾というものの以外に、その庭園の内容を具体的に示す記述は見つかっていない。写真で見る限り、芝生に舗石も配し、植栽や石橋、井戸のようなものもあり、鉢植の植物も並べられており、先の記述のように滝が落ちる仕掛けもあったということからも贅を尽くした壮大な屋上庭園であった

ことが伺える。なお、永井龍雄が岩谷松平を主人公にして読売新聞に連載した新聞小説『けむりよ煙』の中で「銀座の表通りに面した店舗は間口 30 間、煉瓦の総 2 階建てだが、それを背に別棟を建て階下は倉庫屋上が庭園になっていた。築山あり、植込みもたっぷりした当時としては珍しいものだった」と記されている。

その証拠に、明治 42(1909)年 10 月 4 日付けの都新聞に「かつて岩谷松平氏は屋上に一大庭園を造り、世人の大喝采を博した」とある。また、この記事には「屋上庭園、元祖は岩谷松平」という見出しが付けられている。作庭年代は不明であるが、屋上庭園のある建物は明治 37 年には買収され、無くなったということもあり、岩谷松平の足跡や、岩谷松平についての研究者の見解から総合的に判断すると、明治 20 年代後半から 30 年代初頭にかけてつくられたものと推察される。

何故、岩谷松平が屋上庭園をつくったかについては、おそらく、たばこを売るために宣伝上手であった彼が、その頃では珍しい壮大な庭園を店舗の 2 階につくることで、世間の注目を引き、宣伝の道具につかったものと思われる。その証拠に明治 34 年 3 月に、今日でいう CM ソングである「天狗煙草当世流行節」をつくり、その一節に「屋根の上にもお庭がござる、岩谷でなんとしよ。富士のおそのに川もある。見下ろせば滝の音。天狗はえらいね。テナコトオッシャイマシタヨ。」¹⁴⁾とある。

(2) 東京銀座服部長七邸の屋上庭園

人造石販売業(左官業)の服部長七は、多くの土木事業を手がけ、自ら開発した「長七たたき」(現代のセラミックス関連のトップ企業が開発した‘焼かずに固めるセラミックス床材’)にも応用されているもので、その分野ではつとに有名な歴史的な人物である。その自宅が当時の京橋区銀座 1 丁目にある屋上庭園がつくられていた。その屋上庭園の様子について、富家正義が明治 29(1896)年 7 月発行の『日本園芸学雑誌(第 74 号)』に、日本園芸学会第 24 回小集会で、田中芳男氏の説話の概要を「服部氏の屋上の庭を観る」という題目で詳しく報告している。その内容がそのまま東京都庁編纂の『東京市史稿(遊園編第七)』に「この頃、銀座に屋上庭園を築造して住する者有り」と題し、転記されている。さらに、その概要が読売新聞の明治 29 年 8 月 21 日号の朝刊にも「屋上の庭園」と題し、掲載されている。当時、大変な話題になったことが容易に推察される。作庭年代も明治 29 年あるいはそれ以前であることも明白である。自前の人造石を駆使して建てた自宅の屋上に灯籠や手水鉢、飛石、沓抜石、さらには池や植栽を配した本格的な日本庭園であったという。先に述べたような記事の中に、屋上庭園の内容を示す、詳細な記述はあるものの、その実物が映っている写真はない。服部長七の曾孫の自宅等にも、その写真等資料は一切、残されておらず、曾祖父の自宅の屋上に庭園がつくられていたという事実すら曾孫の方は承知していなかった。郷土史家の中根仙吉による「服部長七



写真-2 岩谷松平の屋上庭園(たばこと塩の博物館提供)

伝」¹⁵⁾にも屋上庭園のことは一切、触れられていない。

5. 屋上庭園という呼称について

黎明期の当時、建物の屋上部につくられた庭園は何と呼ばれていたかということ、明治 29(1896)年に服部長七のものを紹介した『日本園芸学雑誌』には「屋上庭園」という表現が何度も使われている。筆者の調査では今の所、屋上庭園という言葉が初めて出てきたのは、この記述である。明治 40 年の三越呉服店の広告には「空中庭園」、明治 42 年に岩谷松平や水橋義之助のものを紹介した都新聞の記事では「屋上に作庭(やねのうへにつくりには)とされていた。また、何と明治 42 年に発行された北原白秋らによる文芸誌のタイトルが『屋上庭園』であった。屋上緑化に関しては全くの門外漢である俳人らの雑誌の名称に使われたことからすると、この頃にはある程度、屋上庭園という言葉が一部で認知されていたと推察される。明治 43 年、ニューヨークのものを紹介した読売新聞の記事にも「屋上庭園」という表現が用いられ、建築雑誌には「屋上庭園の備」という記事が掲載された。同年に浅草のルナパークのものを紹介した建築雑誌の記事には「屋上ルーフガーデン」と表現され、同様のことを報じた読売新聞では「屋上庭園」と表現されている。時代が進んで大正から昭和の初期にかけて造園や住宅の関係雑誌には多くの識者が相次いで「屋上庭園」という表現を用い、関係記事を書いている。

今のところ、日本最古の屋上庭園である箱館の武蔵野楼のものが、当時何と呼ばれていたのか、関係する記述は見つかっていない。大変興味深いところである。いずれにしても「屋上庭園」という言葉自体、明治中期から使用され、その他では「空中庭園」や「ルーフガーデン」という呼称も使われていたが、屋上庭園が圧倒的に多い。現在、頻繁に使用されている「屋上緑化」という用語がいつ頃から使われだしたか定かではない。昭和初期までの関係文献等には、その記述は見当たらない。

6. 屋上庭園がつくられた理由・目的

幕末から明治にかけて何故、屋上庭園がつくられたのかは大変興味深い。ニューヨークの屋上庭園事情を報じた明治43年8月27日付の読売新聞には「西洋で流行る屋上庭園の設備を作る事は将来、京橋、日本橋辺の空地の少ないところでは小公園を作ると等しく大いに必要なことでもあるし、都会の美観を増す手段にもなるのである。」と記述されているように土1升金1升の土地の有効利用ということが、まず挙げられる。都市の美観形成や屋上からの眺望や展望を楽しむためという理由もあった。また、幕末につくられた箱(函)館の妓楼の武蔵野楼の屋上庭園は、当時、箱館には21軒もの妓楼があったとされていることから、おそらく屋上に庭園をつくることによって世人の注目を喚起し、宣伝・集客効果を狙った営業戦略上の仕掛けであったと推察される。同様に岩谷松平の店舗兼住宅も稀代の宣伝上手と言われた岩谷のこと、同業者との熾烈な煙草の販売合戦を勝ち抜くため、明らかに屋上庭園も宣伝効果を狙ってつくったものと思われる。また、先に述べたように明治42年10月4日の都新聞に「かつて岩谷松平氏は屋上に一大庭園を造り、世人の大喝采を博した」と記述されていることから、そのことを窺い知ることができる。その後つくられた東京銀座の三越呉服屋店や明治42年に横浜伊勢佐木町の越前屋呉服店などの百貨店は明らかに宣伝・集客効果を狙ったものである。また、同新聞記事には、日本橋小伝馬町の水橋義之助が住宅の屋上に京風庭園をつくったことが報じられ、「新築したれども、階上の風通不十分なると、玄關食堂は平家の建続きになり居るより、夏に至れば暑さ甚きゆえ、遂に庭を造らんと思立ち」と記され、既に当時から今日と同じように、夏の暑さ対策で屋上庭園がつくられていたということは大変興味深い。既にこのことは、明治29年8月21日の読売新聞で服部長七の屋上庭園を報じる記事にも同様の指摘がなされている。さらに、「屋上庭園の備」と題し、ニューヨークの病院の屋上庭園を紹介した明治43年の建築雑誌には、呼吸気病、神経病患者の大気療法を行うには屋上庭園は最も都合が良いと記述されており、保健衛生効果を狙ったものであることが紹介されているのも興味深い。

以上、当時から屋上庭園は、土地の有効活用策、ならびに都市の美観形成や展(眺)望の場として、また、宣伝・集客効果を上げるため、夏の暑さ対策、さらには保健衛生効果など、様々な役割や効果をあげることが期待され、つくられてきたことが判明した。

7. あとがき

わが国では1600年代の後半から1700年代初めの江戸で既に芝生屋根がつくれ、また文久年間(1861~1864年)には箱(函)館で本格的な屋上庭園がつくられていたことが解った。これらが今のところ、わが国における最古の芝生屋根、屋上庭園であるとみなせる。また、詳

細は不明であるが、横浜居留地に明治14(1881)年につくられたアメリカ系船舶供給会社のラングフェルト&メイアーズ社の屋上に庭園がつくられていたことを示す絵と絵葉書(古写真)も入手している。いずれにしても明治中期が日本における屋上庭園の黎明期にあたり、本格的なコンクリート建築物が導入されるようになった明治40年以降、陸続と屋上庭園がつくられるようになった。これらについては別途、体系的に整理して発表する機会を持ちたい。ところで、屋上庭園の黎明期の代表作とも言え、同じ東京銀座で、ほぼ同時期に本格的な屋上庭園をつくった岩谷松平と服部長七とどちらのものが先につくられたのか大変興味深いところである。先に述べたように服部長七のものは明治29年かそれ以前であることは間違いない。『明治世相編年辞典』¹⁰⁾には、明治29(1896)年6月「この頃、服部長七氏屋上庭園を築造す。(中略)こうした試みは、その後も金満家の道楽として岩谷松平などにより数奇をこらしたものが喧伝された。」とある。しかしながら、岩谷松平のものは先述したように明治20年代後半から30年代初頭にかけてつくられたものであり、どちらが先か、その順番は判然としない。

なお、最古の屋上庭園や黎明期の屋上庭園の作庭に具体的どの様な人が、いかなる技法を用い携わっていたのかも究明するつもりでいたが、残念ながら現在、これらの点を示す資料は見当たらず、今後の課題としたい。

本稿の作成にあたり、多くの関係機関や関係者から貴重な資料や示唆に富む助言の提供を受けた。記して誠意を表したい。

引用ならびに参考文献

- 1)山田宏之(2004):屋上緑化今昔:インタラクシオン,4-24
- 2)亙理俊次(1991):芝棟—屋根の花園を訪ねて—:八坂書房
- 3)渡辺京二(2005):逝きし世の面影:平凡社,432-434
- 4)欧州茅葺き視察研修報告書刊行会(2002):ヨーロッパの茅葺きとその技術
- 5)諏訪春雄・内藤昌(1972):江戸図屏風:毎日新聞社
- 6)波多野純(1987):江戸橋広小路の変遷と復元:国立歴史民族博物館研究報告第14集,33-37
- 7)波多野純(1988):復元・江戸の町:筑摩書房,86-91
- 8)北村文雄(2001):芝草物語:ソフトサイエンス社,122-129
- 9)北海道史研究会編(1985):函館・道南大辞典:国書刊行会,441-442
- 10)須藤隆仙(1978):ふるさと想い出写真集明治・大正・昭和:函館、国書刊行会,129
- 11)菊池明・横田淳(1999):箱館戦争写真集:新人物往来社,153
- 12)新人物往来社編(2002):新撰組史跡事典:新人物往来社,50
- 13)小森孝之編(1983):写真集 明治・大正・昭和 銀座:国書刊行会,24
- 14)大溪元千代(1981):近代たばこ考:サンブライト,36-37
- 15)中根仙吉(1996):服部長七伝「復刻」:岩津天満宮
- 16)朝倉治彦・稲村徹元編(1995):明治世相編年辞典,380